▽取組事例名	松山島博覧会の開催	▽取組期間	平成２２年度
		▽市町名	松山市

▽取組概要

島しょ部の交流人口の拡大や産業経済の活性化などを目的として、平成２２年度に「松山島博覧会」（通称しまはく）を島しょ部で開催した。
この「しまはく」は、豊かな自然、農水産物、伝統・文化、食など、島の有する地域資源に磨きをかけ、これらを最大限に活用した魅力ある体験メニュー等を創出し、情報発信するとともに、島でしか感じることができない「ありのままの心地よさ」を体験していただき、多くの人々に島の魅力を伝えることに取り組んだ。

▽取組みの背景

本市の島しょ部は、豊かな自然や伝統文化など、魅力ある地域資源が数多く残っている地域であるが、近年は島の基幹産業である柑橘栽培や漁業の低迷など産業の不振と相まって、過疎化・高齢化が急速に進んでいる。
また、平成１７年１月の市町村合併により旧中島町の有人６島に旧北条市の安居島が加わったことで、本市は有人島９島と多数の無人島を有することとなった。そこで、島しょ部の振興を図るため、住民主体のまちづくり研究会「みんなのまつやま夢工房」において「島しょ部の活性化」をテーマとして、平成１７年４月から半年間ご議論いただいた結果、最終的には３６項目に及ぶ「島しょ部の活性化」への提言となって結実したが、それらの提言の一つに「松山島博覧会（しまはく）の開催」があった。
本市では、その提案を受け、様々な検討・協議を重ねた結果、島の振興を図り活力を再生するために、市民主体の「しまはく」の開催を決定した。

▽取組みの狙い・具体的内容

（取組みの狙い）
「しまはく」は、多くの方々に島の魅力を知ってもらうためのきっかけづくりであるとともに、そこで生まれた様々な魅力ある体験メニューなどにより交流人口を増やし、島の活性化につなげることを目的としている。

（具体的内容）
① 集客イベント（26,367人）
オープニングイベント（4/29、24,200人）、
中間イベント
・夏フェスタｉｎ中島（7/17、1,100人）
・秋フェスタｉｎ興居島（10/23～24、667人）
しまはくエンディング（10/31、400人）
② コアイベント（4,741人）
各島の島びとが主体となって行う農漁業等の体験メニューやイベントなど
③ 広域連携イベント（1,110人）
各島・地域と連携したクルージングイベントなど
④あいのりイベント（7,598人）
既存の行事やイベントの拡大・拡充開催など

▽取組みを進めていくなかでの課題・問題点（苦労した点）

「しまはく」の開催にあたり説明会を実施したが、島びとからは「そんなことをしても何も変わらない」という意見が多くあった。そこで、職員が何度も島に足を運んで信頼関係を築いた結果、徐々に魅力ある体験メニューの創出に取り組む人が増加してきた。こうした粘り強い取組みにより、島びとの意識も変化し、島の活性化を目的として「しまはく」を開催するとの認識のもと、前向きに「元気な島づくり」に取り組む機運が醸成されてきた。

☆工夫した点

本市では、実行委員会を立ち上げ、あらゆるメディアを使って、「しまはく」の広報宣伝を行うとともに、島びとが体験メニューを実施しやすく、お客様が島に足を運びやすい環境を整えた。
(1) 体験メニュー等補助金・・・体験メニュー立ち上げに必要な経費等に対する補助金を交付した。
(2) 復路運賃補助・・・島の体験メニューに参加する人に対して、帰りの旅客運賃を全額補助した。

▽取組みの効果

「しまはく」では、恵まれた自然や豊かな農水産物、歴史文化遺産など、島特有の資源を情報発信し、多くの人々に島の魅力を知っていただいたほか、島びと自らが「元気な島づくり」に取り組む機運が醸成された。
「しまはく」終了後は、これらの取組みを一過性のものにしないように、実行委員会を解散する一方で、新たに「まつやま里島ツーリズム連絡協議会」を立ち上げ継続的に体験メニューを実施するなど、地域の活性化に向けた取組みを行っている。

▽住民（職員）の反応・評価

島びとが普段から見慣れている地域資源が持つ価値を再認識するとともに、多くのお客様との触れ合いを通してやりがいを感じたほか、新たな島のファンの増加にもつながったことから、島びと自らが「元気な島づくり」に取り組む機運が醸成された。

☆取組み効果を踏まえたフォローアップ

まちづくりに住民自らが取り組めるよう、既存の住民の組織である中島総代会、興居島各町連絡協議会、まつやま里島ツーリズム連絡協議会、松山離島振興協議会、中島地区まちづくり協議会などの地元関係機関と連携を密にし、行政と島びととの協働による、さらなる里島活性化に取り組む。

☆将来的な構想のほか、他団体へのアドバイス

本市の島しょ部に限らず、地方においては過疎化、少子高齢化が急速に進んでおり、地域を取り巻く環境は、極めて厳しい状況となっている。このような状況を打開するためには何らかの振興策が必要で、本市においてはこの「しまはく」の開催を起爆剤として、交流人口の拡大や雇用の創出、産業経済の活性化などを目指した。
また、この「しまはく」での取組みを一過性のものにせず、継続的に実施することにより、島びとのまちづくりに対する意識の改革にもつながると考えている。
「しまはく」の開催にあたっては、行政の一方的な押し付けではなく、島びとの主体的な取組みや地域資源の掘り起こしが必要不可欠であった。松山離島振興協会といった島の活性化に取り組む団体などと協働するとともに、職員が島に何度も通ったり、自分の足で島内を歩くことによって、島の方々との信頼関係を構築し、新たな地域資源を発見することができた。